
私の屍とパズルのピース

すみやき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の屍とパズルのピース

【Nコード】

N4271S

【作者名】

すみやき

【あらすじ】

いきなりクラスメイトに告白された私と幼なじみでパズルオタクの佑たすく、その二人の自意識の不安定　それが書けてればいいな……なんてことを思って書いた短編小説。

「あの……好きです。その、えーと付き合ってください」

放課後の体育館裏。どうやら私は男子に告白されたようだ。

告白してきたのは田原幸弘という名前のクラスメイト。彼はクラスでは目立つほうではない。かといって空気でもない中途半端な存在。それが田原幸弘。

告白をした直後の田原は下をじっと向きながら髪の毛をいじっていた。

ていうかその髪型何なんだよ。どう見てもいつもの髪型と違うし。もしかして告白するからって髪型いじって来た？ 何なの？ 馬鹿なの？ どうりでさつきから変な臭いがここら一面を漂っていると思っただのだ。甘ったるくて気持ち悪いヘアワックスの臭い。気持ち悪がってる私をよそに田原は黙ったまま髪をいじり続けている。

いや無理無理。絶対無理。そもそも田原とか生理的にうけつけないし。付き合うとか本当に勘弁して欲しい。ここはぜひとも丁寧にお願いしたい。

よし断ってやる。いまからこいつをふってやる。田原幸弘を失恋させてやる。

告白なんかしてくんな馬鹿。いまからふってやるから見てる馬鹿。「ごめん。私、バスケット部の人が好きなの」とか言ってふってやるよ馬鹿。そんでふられたらバスケットで全国でも目指せよ馬鹿。バスケットマンになれよ馬鹿。リバウンド王になれよ馬鹿。とりあえず君は日本一の高校生になれよ馬鹿。あきらめたらそこで試合終了だ馬鹿！ とりあえず私は大きく深呼吸。その時にヘアワックスの臭いが鼻の中に入ってきてせきこみそうになったがとりあえずそこは気合いで我慢。そして私は重い口を開く。

*

どうやら私に彼氏ができてしまったらしい。

相手は田原幸弘という名のクラスメイト。彼はクラスでは目立つほうではない。かといって空気でもない中途半端な存在。それが田原幸広。

ていうかさ。断れるわけがないじゃん。あんな告白の場に大人数で来られたら。

男だったら告白するときぐらい一人で来いよ。複数で告白しに来るのは女子の特権だよ。女子なのかよお前。

さっそくメアド交換を余儀なくされ、今週末にデートの約束まで結ばれてしまった。っていうか遊園地ってなんだよ。なんでそんな人が集まるところにわざわざ行かなきゃいけないんだよ。私がお化け屋敷で「きゃー」とか言って腕にしがみつくのとか期待してるの？　そこで男らしさをアピールとかって思ってるの？　っていうかそれってどこの雑誌に載ってる恋愛必勝テクだよ。それとそんな雑誌を鵜呑みにするなよ馬鹿。あといいかげん現実みるよ馬鹿。お前が思ってるほど女子はか弱くないぞ馬鹿。もしかしたらお前ら男子よりもたくましいぞ馬鹿！

そしてお約束通りに「一緒に帰ろう」とか言い出した。何だよそれ。恋愛漫画の読み過ぎだよ馬鹿。お前が帰り道で話すであろう話題になんか興味ないんだよ馬鹿。男だったら一人でさっさと帰って再放送の連ドラでも見てる馬鹿！

とりあえず私は「塾があるから」って言ってなんとか断った。もちろん塾なんか通ったこともない。しかしこう言えば大概の誘いを断ることができることを私は知っていた。どうやら私と同じ年代の高校生は何よりも塾とか予備校を重視するらしい。どうせ疲れて居眠りしてるんだったら、家で勉強しての方がましじゃないかななんて私は思う。まあいつも言い訳に使わせていただいているので、塾への悪口はこのくらいにしておこう。ただダイレクトメールとか送っ

てくるな、と塾とか予備校関係の方に申し上げておきたい。資源を大切にするために、うちのお母さんの機嫌を損ねないためにも……ね。

私は学校を出て自宅のある方面へと歩き出した。学校を出る時間が早かったのか、丁度小学生の集団下校に出くわした。

ランドセルを背負って黄色い帽子をかぶっている小学生達。その小学生達は何やらリズムをとりながら順番に固有名詞名を言い合っていた。それは私の知っているしりとりとか山手線ゲームとかマジカルバナナといった類のものではなかった。こういうゲームが今小学生の間で流行っているのだろうか。

黄色い帽子の集団を見ているとなんだか懐かしくなってくる。といっても四年前までは私もあの集団の中にいたんだろうけど。四年の間にあの集団の中にはいれない体になってしまったようだ。私はなんだか寂しいような悲しいような、胃の奥がずんぐりと重たくなるような微妙な気持ち悪さを感じた。

連想ゲームをしている集団が通りすぎると、今度は男の子と女の子が手をつないでやってきた。さきほどの連想ゲーム集団と同じ小学校の生徒だろうか。二人は何にもしゃべらずに、ただ手を繋いで歩いていった。

付き合っていていうのはああいうことを言っただろうなって思った。今の田原と私の関係とは大違いだ。

私ที่บ้านに到着したのはそれから十分後のことだった。自宅のドアには鍵が掛かっていた。まだ誰も帰ってきていないようだ。

私はドアを開ける。すると暗くて静かな我が家が私を迎えてくれていた。

さてどうしようか。

私は靴も脱がずに玄関先に腰を下ろす。このまま誰もいない家一人でいてもつまらない。かと言って私にはすぐに呼び出せるほど中

の良い友人も、どこか遊びに行くためのお金も持ち合わせてはいない。

そこで私は廊下にスクールバックを放り投げると再び外に出て家の鍵をしめた。そうしなければ行くところはひとつである。

向かったのは十メートル先の隣のお家。鍵が開いていたので呼び鈴を鳴らすわけでもなく、黙って中に入った。

そして玄関横の階段を上がると、突き当たりの部屋にある。この部屋が私の目的地だった。私はノックもせずにドアを開け、中に入る。その部屋には机に向かってなにやらぶつぶつ言っている男がいた。彼は女の子のように長い髪をして銀縁の眼鏡をかけている。やせ細った彼の針金のような体は放っておいたら今にも倒れてしまいそうだ。

そんな彼が机に向かってやっているのはパズルだった。机の上には目が痛くなりそうなほど小さくて色鮮やかなピースが全体に広がっている。

そして彼は大きなヘッドフォンをつけていた。大音量で聞いているようで音が漏れてここまで聞こえてくる。どうやら聞いているのは一昔前に流行った J・pop らしい。もうテレビでは見ない一発屋バンドのメロディがヘッドフォンからこっちに流れてくる。

私は彼に近づき、彼の耳からヘッドフォンを外す。すると彼はやっと私に気づいたらしく、私の目を優しく見つめていた。

「来てたの？」

彼は私に尋ねる。まだ声変わりをしていないらしく、彼の声は女の子のように高くそして澄んでいた。

「ん」

私は頷く。彼は私の声を聞くと再び机に向かってパズルと格闘していた。

このパズル野郎の名は中沢なかざわ 佑たすく。私のお隣さんであり、クラスメイトでもある。

「田原とつきあうことになった」

佑の背中に私は話しかけた。佑はこつちを振り返らず「田原って？」と私に尋ねる。

「同じクラス。ていうかあんたの隣の席の」

佑は天井を仰いだ。だいたいこういう時は何かを考えている時だ。

「ああ、彼か。そうか……彼は田原っていうんだ」

そうかそうか、とつぶやいた後、佑は再びパズルのピースを手にとった。

たぶん佑の頭の中は常にパズルのピースで埋め尽くされているんだろう。この部屋にいるときでも、たぶん教室にいるときでも。そのぎつしりパズルのピースがつまった頭の中にはクラスメイトの名前が入るスペースなんてありやしないだろうなって思う。

佑はずっとこうだった。佑と私は生まれたときからずっとお隣同士であり、いわゆる幼なじみというやつだ。

だから佑の両親が共働きで、二人とも深夜にならないと帰ってこないことも知っているし、佑がいつもこの時間帯には家に帰ってパズルに熱中しているということも知っている。

それにしても、もうちょっと反応があってもいいんじゃないだろうか。幼なじみの女の子が同じクラスの、しかも隣の席の男子と付き合っつて言っているのに。

けど中沢佑という人間はそういうやつなのだ。パズルさえやっていればそれでいいのだ。たぶんそれが彼にとつての幸せなんだろう。

佑は授業中も休み時間中も机に突っ伏している。

やることがないから机に突っ伏しているのか、それとも純粹に寝ているのかはわからない。学校にいる間はひたすら突っ伏した姿勢から動かない。トイレに行くこともご飯を食べることもない。入学してしばらくは先生も注意をしていたが、今になっては完全に放置嫌みを言うことさえしない。たぶんあきらめているのだろう。

私は部屋の隅にあるパイプベッドに横になる。ぎしっとしなる音

がしたが当然佑はこの音には気づかない。

佑のベッドからは何の臭いもしなかった。私は男の子のベッドとかって汗くさいイメージを持ってただけど、このベッドからは男の子の匂いが感じられない。佑の匂いがしないのだ。こうなってくる。と佑が毎日ベッドで寝てるのかどうかもわからなくなってくる。教室であんなに寝ているから家では眠くないのかなかと思う。というより家で寝てないから学校で寝ているのか。どっちにしても佑の健康状態が心配でしようがない。

私がそんなことを考えている間も佑はパズルに没頭していた。紙と紙をつなげるだけなのに何がそんなにおもしろいんだろうか。

私だっただけと机に向かうことなんて耐えられないな、と思う。ただでさえ一日中学校で机に縛られているというのに。

「ねえ、楽しい？」

私は佑に尋ねた。

「……普通」

パズルのピースを見つめたまま佑は答えた。普通って言われてもこっちはどういいうりアクションをとっていいものかわからない。

佑は再びヘッドフォンをつけ始めた。こうなってくると完全に自分の世界に入り込んでしまうのだ。私という存在も完全に彼の頭の中にあるパズルのピースに追い出されてしまう。

私はそっと立ち上がり佑の部屋から出ようとする。

「……帰り、気をつけて」

佑がぼそっとつぶやく。私に聞こえるぎりぎりぐらいの声。

「ありがとう」

私は佑にお礼を言って、佑の部屋を後にする。

私の声が佑に届いたかどうかはわからない。

*

朝、私が家を出ると佑が歩いているのが見えた。

いつも学校で見るとような眠そうな顔だった。あの後も夜通しでパズルをやっていたのだろうか。

私はそつと佑の後をつける。佑は見るからにふらふらで今にも倒れそうだった。

「よっ」

私は佑の肩をたたく。しかし佑からは何の反応も返ってこない。

「おーい」

私は手を佑の目の前で振ってみる。

するとようやく佑も私に気づいたようで、私の方へと振り返る。

そのときに佑の前髪がさらりとなびく。この男は寝癖という言葉とは無縁の人生を送ってきたんだろうなって思う。私はいつも学校で始業のチャイムギリギリに教室に飛び込んでくる男子達の寝癖を思い浮かべた。佑はこういう面でも他の男子とは違うんだなっと思う。

まったくそれにしてもなんだよ。その男なのに癖のひとつもないその髪。私にくれよ。お願いだから。

「……おはよ」

今にも死にそうな声で佑は私に朝の挨拶。ノストラダムスも2000年問題も遠い過去になった今、世界中探してもこんなに死にそうな顔をしているやつもそうはいないんじゃないだろうか。

「寝た？」

「……少し」

またまた死にそうな声で佑は答える。佑が言う「少し」は私の言う「少し」とはまた違うんだろうなって思う。佑の「少し」は時間でも、分でもなく秒単位なんじゃないだろうか。私だと五時間でも寝たうちには入らない。

「もつと寝た方がいいよ。でなきゃ本当に死んじゃうよ？ やだよ。佑死んじゃったら。葬式やったらクラスのみんなが私の家見ることになるんだよ？ そんなの嫌だよ」

もちろん本心ではない。けど今考えてみるとクラスメイトに自分

の家を見られるの嫌だな。干してある下着とかを見られたら困る。母親の下着を見て私のだと勘違いされたらもつと困る。

「死なないよ。たぶん。……わからないけど」

あいかわらず、ぼーっとした顔で佑はつぶやく。その顔で言われたら説得力のせの字もないんですけど。

けど本当に佑が死んだら私はどうするんだろう。やっぱり泣くのだろうか。

私は未だに人の死というものを経験したことがない。家族はおろか、親戚もみんな健在だ。

佑がいなくなる。なんかそんなことを考えていたら軽く泣きそうになる。別に涙もろいわけじゃない。けどなんか……。うん、今日の私はなんだか変だ。

私はそんな死にそうな佑と一緒に登校した。こうしてみるとクラスメイト同士じゃなくてお年寄りとそのヘルパーさんみたいだ。

私は佑と一緒に教室に入る。その瞬間クラス中の視線を感じた。考えてみれば当たり前かもしれない。昨日田原に告白された私が別の男子と教室に入ってくるのだ。それもクラスから変人扱いされている佑と一緒に……。だ。

私と佑に集中していた視線はいつのまにか消えてなくなった。みんな私と佑が偶然一緒に入ってきたように思ったのだろうか。

佑と私はそれぞれ自分の席に着く。私と佑の席は同じ真ん中の列に位置している。私が一番後ろ、佑が一番前の席だ。だから授業中はおのずと佑が私の目に映ることになるのだ。私が佑の後ろ姿を見るのと同時に、隣の田原が目に入る。私の恋人であるはずの田原はなんだか遠く見える。

一時間目は英語の授業だった。この英語の先生は毎回英単語の小テストをする。そして採点が終わるといつも成績上位者を黒板の左端に書くのだった。

今日もいつものように左端に成績上位者の名前が黄色いチョークでかけられる。そしていつものように書かれる『満点 中沢佑』の文字。

いつものことなのでクラスのみんなは別にこれといった反応を見せない。学校が始まってから今まで英語の時間の黒板に『満点 中沢 佑』を見ないときはない。

これは英語に限ったことではなく、佑は全科目において満点をとる。授業中は常に机に突っ伏しているにもかかわらず……だ。

そして家ではパズルしかしてない。本当にいつ勉強しているのか謎だ。そもそも常に机に突っ伏しているのにどうやってテストを受けているのかも謎だ。

結局、この日の授業で佑が起きあがる時はなかった。

*

おかしい。絶対におかしい。

なんとか今日も田原の誘いを断って佑の家に来たのだが、なんと家に鍵が掛かっていたのだ。どうやら佑がまだ帰ってきていないらしい。いつももだったらお決まりのスウェットの上下を着てパズルを始めているのに。

しょうがなく自分の家に戻ろうとすると、ちょうど佑が歩いてくるのが見えた。

「佑。どうしたの。遅いじゃん。今日」

私は歩いてくる佑に駆け寄る。

なんで佑のもとに走っていったのかは自分でもわからない。待っていれば佑はくるはずなのに。けど佑の姿を見た瞬間に安心してしまった自分がなんだか悔しい。

「別に」

いつものように佑は素っ気ない返事を返す。しかしなんだか佑が変だった。

まあ佑はいつも変なのだが、今日はいつもにまして変だった。

なんかいつもよりもふらついていているような。それでいてなんだか額に紫っぽい痣が。

痣？

「ねえ、それどうしたの？」

「それって何」

「何じゃないでしょ。ちよっと見せて」

私は佑の顔をのぞき込んだ。痣だけじゃなかった。眼鏡は不自然な方向に曲がっているし、口の先は切れて、唇がぷっくりふくれあがっている。

「ねえ、どうしたの。ねえ」

「別に」

「別にじゃないよ。その怪我」

「転んだ」

絶対嘘だ。どうやって転んだらそんな不自然な怪我をするというのだ。あきらかに人にやられた跡だ。

「ちよっと待ってて、薬持ってくるから」

「いいよ」

佑はそう言うのと鍵を開けて家の中に入っていった。私は自分の家に戻って、薬箱を持って佑の部屋に向かった。今思えば佑の家にある薬箱を使えばよかったのだが、私は気が動転してしまっていて、そんなことに気づく余裕がなかった。

佑はいつも通りに黒のスウェットに着替えてパズルに没頭していた。昨日までと何も変わらない光景だった。

「佑」

佑は答えない。

いつものようにパズルに熱中している。私はパイプベッドのところに薬箱をおいた。

佑がやっているパズルは昨日とは違うものだった。もう昨日のはやり終えたのだろうか。

佑の怪我はたぶん田原の仕業だ。本人が直接やってないとしても田原のまわりにいるやつらの仕業だろう。

私と一緒に教室に入ったから佑は目をつけられたのだろう。もしか

すると一緒に登校しているところまで見られていたのかもしれない。佑にこれ以上怪我のことについて聞くつもりはなかった。聞いたところで佑が本当のことを言わないことはわかっている。

佑にだって男子のプライドってものがあるだろうし、怪我のことは一刻も早く忘れたいできことだろうし。

昨日のパズルは扉の近くにあるカラーボックスの上に置かれていた。完成したパズルには気球の絵が描かれていた。あまり大きなタイルのパズルではなかったが、私がこのパズルをやったらきつと開始三分でギブアップだろうなって思う。

私はピースの一つに触れてみた。まだ接着剤でくっつける前だったらしく。ピースひとつを簡単に摘み上げることができた。

なんでパズルなんてものがあるのだろう。なんでこんなものが楽しいのだろう。

そしてなんで佑はずっとパズルを続けているのだろう。私の頭の中はパズルのピースではなく、はてなマークで一杯になっていた。

パズルのピースを見つめると、なんだかこれが私みたいに思えてきた。

何にも言わないで、ただみんなに嫌われないように大人しくしている。

みんなが笑ったら面白くなくっても笑う。

隣の席の女の子が語るくだらない恋愛哲学にも相づちをうつ。

教室という名前のパズルの台においては私はパズルのピースのひとつでしかない。そんな自分が私は大嫌いだ。

私は摘みあげたパズルのピースを口の中に入れてみた。そしてそっとピースを噛んでみる。苦い、そして堅かった。

堅いパズルのピースは私の唾でだんだん柔らかくなっていった。そしてパズルのピースをかみ切ることができた。そして私は噛み切った小さな破片を飲み込んだ。気持ち悪くなるかと思ったら意外にも平気だった。それどころか心地よささえ感じた。

これでこのパズルは完成しなくなった。気球を描くことができなくなってしまうのだ。この欠けたピースのせいで。

「佑」

返事がない。まるで屍のようだ。

私は屍の机に近づくと、彼がやっている最中のパズルのピースをひとつ取り上げてみた。

すると佑がこっちを向いた。

田原にやられたであろう屍の唇はさつきよりも腫れあがっていた。屍の唇を見た瞬間に私の頭の中で何か弾けた。はてなマークがはじけたのだろうか。それともほかの何かをはじけたのだろうか。それは今の私にはわからなかった。

そもそも自分自身というモノ自体がよくわからなくなって来た。だんだんなんでもできそうな気になってきた。なんでもやってやろうと思った。誰にも私は止められない。

なんでもできる、なんでもできる、なんでもできる。私は何かなんだかわからなくなっていた。

「あっ」

屍の声が聞こえた。

私は自分の唇を屍の腫れ上がっている唇に押しつけていたのだ。

佑の唇はすごく柔らかくて、鉄の味がした。ファーストキスはレモンの味なんて言うけど、そんなことは嘘だと思った。なんだか顔が熱くなってくる。なんだかそれが無性に恥ずかしくなってくる。

なんで急に佑にキスをしたくなっただのかわからない。普段の私では考えられないことだと思う。というより今の私はいつもの私じゃないのかも知れない。というより私は私じゃないのかもわからない。ただものすごい満足感で満ちあふれていた。やってやったと思った。もしかしたらキスじゃなくてもよかったのかもしれない。ただ気持ちよかった。すごく気持ちよかった。

私は右手に持つてる仲間はずれのピースを見た。

こんなピースに私はなりたいたいと思った。いや絶対なってやると思

った。

私はそう決意して、唇をさらに強く押しつけた。とりあえず今はこの満足感にいつまでも浸っていたかった。

机の上のパズルのピースが崩れ落ちる。どうやらこのピースを拾うのはもうちょっと後になりそうだ。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4271s/>

私の屍とパズルのピース

2011年10月8日23時01分発行